



八二三戦史館



SNET台湾 みんなの台湾修学旅行ナビ
https://taiwan-shugakuryoko.jp/spot_island/313/



エリア

金門県

テーマ

歴史

政治

八二三戦史館

中台「熱戦」の記憶を鮮明に伝える

1958年8月23日、中国の人民解放軍は、福建省の主要都市・廈門から海を隔てて数キロの距離にある金門島に対し、突如猛烈な砲撃を開始しました。わずか一日で5万7千発を超える砲弾が撃ち込まれたこの島は、中華民国政府が1949年12月に中国大陆から台湾に撤退した後も、中華人民共和国による「解放」を免れ、台湾島、澎湖島、馬祖島とともに、中華民国政府の実効支配下に留まりました。砲撃が始まった日から八二三砲戦とも、あるいは第二次台湾海峡危機とも呼ばれる戦闘は、金門島に甚大な被害をもたらしました。この戦いを記念して1988年に建てられた八二三戦史館では、東西冷戦下の中台間の「熱戦」について、体系的な理解が得られます。

学びのポイント

1.

金門島と台湾の関係は?

今日、「台湾」という言葉は、二つの意味を持っています。狭義の台湾は、台湾島(77の付属島嶼を含む)を意味し、広義の台湾は、中華民国政府が実効支配する台湾島、澎湖島、金門島、馬祖島の総称で、現在では、国際的にも中華民国よりこの呼称が一般的です。しかし、約50年間日本の植民地統治下にあった台湾島、澎湖島と、1912年の中華民国成立以来、ほぼ終始その一部を成し(金門島は戦時中、日本の軍事占領を受けた)、日本の植民地統治を経験していない金門島、馬祖島は、歩んできた歴史に大きなちがいがあります。台湾とは何かを考える上で重要な金門は、台北から飛行機で約1時間。中国福建省の大都市・廈門から海をはさんで数キロに位置し、天気が良い日は互いに眺めることができます。

2.

八二三砲戦とは?

日本との戦争(1937～45年)に勝利してからあまり長い時間を経ずに、中国大陆では中国国民党と中国共産党の対立が内戦に発展しました。その結果、共産党は1949年10月に北京で中華人民共和国の成立を宣言し、国民党は同年12月に中華民国政府を台湾に移したわけですが、前者には社会主義陣営(東側)の盟主であるソ連、後者には資本主義陣営(西側)の盟主である米国がそれぞれ後ろ盾となりました。東西の対立は、直接的に戦火を交えることがない「冷たい戦争(冷戦)」と呼ばれましたが、数少ない「熱戦」の舞台となったのがこの金門島で、1958年8月から10月の間に、実に47万4,910発もの砲弾が中国側から金門島に撃ち込まれました。

3.

八二三戦史館の展示品

八二三戦史館では、砲撃戦の詳細なデータ(1958年8月23日から同年10月までの毎日の着弾数のグラフなど)、砲弾で破壊された集落の精巧なジオラマ、当時使用された兵器など、数々の展示でこの戦闘を多角的に理解することができます。また、中華人民共和国と向き合う中華民国の最前線として軍政が敷かれた金門に、かつて人口よりも多く駐留した兵隊さん(阿兵哥)に支給された紙幣(逃走防止のため金門でのみ流通するようになっている)、金門島海岸に流れ着いた中国側の宣伝物資と中華民国側が中国に流した宣伝物資など、この島ならではの興味深いモノから中台の軍事的緊張の記憶をたどることができます。